

## 観照から実践へ——仙台旧制第二高等学校における昭和初期左傾学生の群像——

田中 祐介

はじめに

本稿が主眼とするのは、昭和初期における旧制高等学校生のマルクス主義に対する態度と反応である。第一次大戦後に日本の知識階級を席捲したマルクス主義は、若い世代の学生青年たちに対しても圧倒的な影響力を行使した。知識階級の没落が叫ばれる不安の時代において、彼等はどのような信念のもとマルクス主義を選び取っていたか。またそこでは直前の時代である大正期に広く尊重された思想や芸術、そして「自己」「人格」「永遠」といった理想はどのように表象されていたか。こうした問題を学生の言説を分

析すること検討する。今回は一個のケーススタディとして、宮城県仙台市に位置した旧制第二高等学校の校友会誌『尚志会雑誌』<sup>1</sup>を課題として扱うこととしたい。

この時代の学生青年の群像は、濱口晴彦も指摘しているように、知識人の社会への進出と挫折という時代的な性格をもつとも体現していたと言える。<sup>2</sup>しかしながら今日に至るまで、彼等の思想や心情が思想的見地から扱われることは決して多くなかった。著名で卓越した個人や集団を時系列に配置する点描的な通史化の手法では、学生の思想は時代の思想潮流を知る格好の材料だとしても、歴史記述からは漏れ落ちざるを得ない。また、この時期の学生の思想と実践はこれまで主としてマルクス主義を信奉する先鋭的

な学生を中心に据えた運動と抵抗の歴史として描かれてきた。しかしそうした広義の学生運動史研究は、理論的、実践的に傑出した一部分の学生の思想を知ることには有益でも、本格的な運動には身を投じなかった学生の心情を知るには最適ではない。さらに運動史研究は、しばしば運動の「源流」を探る試みとも深く結びついている。スミスの『新人会の研究——日本学生運動の源流』にしても、その副題が示しているように、近代日本における学生運動の「源流」を新人会に求める試みであった。その試みが果たした功績は甚大であるが、「源流」から流れ出た革命の潮流がどのようにして他の大学生や高校生に浸透し受容されたかについては充分に知ることはできない。

筒井清忠や竹内洋の歴史社会的なアプローチは、学生の思想を対象に近年大きな成果をあげているものとして挙げられるだろう。<sup>3)</sup> 両者の研究に共通するのは、「大正の教養主義」「昭和のマルクス主義」といった大雑把な二分法を問い直そうとする姿勢である。筒井は昭和以降の学生の読書傾向を分析し、マルクス主義が席捲した後も阿部次郎や倉田百三のいわゆる「教養主義」的な著作が愛読書の上位を占めていることから、大正と昭和の思想傾向の連続性を指摘している。一方の竹内もマルクス主義が教養主義の上位バージョンであったことを強調し、双方ともに読書を

通じた知識の集積を核とするという点で、教養主義の右派が大正教養主義であり、教養主義左派がマルクス主義であるという位置づけも可能だとしている。

筒井と竹内は統計資料と質的資料を駆使しており、研究の成果には目を見張るものがある。しかしそれでも学生の思想の内実についてはなお検討の余地が多く残されている。教養主義右派と左派という区分が妥当であるとして、学生たちはその右派と左派、換言すれば観照と実践のあいだを逡巡しながらどのようにして自分の道を選びとっていたのだろうか。

本稿が扱う旧制高等学校の校友会誌には、学生が何を考え、何を悩み、自己と世界との関係を如何に把握していたかが如実に語られている。旧制高等学校は全国で最大三三三校存在したが、校友会誌は基本的にどの学校にも存在していたと言つてよい。「第一高等学校」「第三高等学校」などナンバースクールを例にとれば、校友会誌の多くは一八九〇年代に創刊され、第二次世界大戦の末期に至るまで年一回以上のペースで刊行が続けられた。一冊あたりのページ数は二百を越えることもあり、廃刊までの通算号数は一五〇号を越えている学校も多い。

学生の煩悶と理想が語られたそれらの豊富な時代的資料は、これまでそれぞれの高等学校の歴史をまとめた「校

史」のなかで細々と存在してきた。彼等の言説を再び明るみに出し思想史的な文脈に置き直すことで、大正教養主義の時代からマルクス主義へと移行する知的潮流の変化の具象体が明らかとなるだろう。

## 1 観照から実践へ

『尚志会雑誌』は、第二高等学校（当時は第二高等中学校）の校友会である尚志会の会誌として、尚志会の設立年である一八九三年に誕生した<sup>4</sup>。発行は原則として隔月であったが、大正以後は年間三冊程度の刊行に落ち着いている。編集業務は尚志会雑誌部が担い、一九四七年の終刊までに計一七九冊が発行された。創刊後しばらくの誌面には、論説・文芸・時評に加え雑報・会報の欄が設けられたほか、運動各部や文芸部（後の弁論部）の活動報告も為され、名実ともに尚志会の機関誌であった。それが大正期に入ると誌面の総合的機能は薄まり文芸誌化の一途を辿る。運動部は次第に雑誌への興味を失い、誌面は「二高生の思想的突出部分の言論」によって占められるようになった<sup>5</sup>という。

本稿が対象とするのは、『尚志会雑誌』にマルクス主義的色彩が濃厚であった大正から昭和への転換期、すなわち一九二五年頃より一九三三年頃までの雑誌言説である。既

にこの時期には第二高等学校の社会主義運動は頂点に達していたと言われている<sup>6</sup>。一九二九年に文甲を卒業した江尻進の回想によると、江尻の在籍していた頃（一九二六―二九年）には、クラスメートの三分の一が左翼的な考え方をもっていたという<sup>7</sup>。さらに江尻より二年遅れて入学した大須賀一郎（一九三二卒）によれば、大須賀の在籍時には文化系の学生ほとんどが左翼化していた。左傾の拡大にもなって弾圧も一層厳しくなったが、江尻の在籍中は『赤旗』や『前衛』が貴重品扱いで回覧され、『共産党宣言』もパンフレットで出回っていた。それが大須賀の在籍時になると、もはやそうした類の書類をもっていることが見づかり次第、検挙されるようになった。

大正期の尚志会の活動の歴史をまとめた『尚志会雑誌』第一三六号（一九二六・一）の「雑誌部史」の記述に従うと、社会主義思想は『尚志会雑誌』にも多大な影響を及ぼし、「古き觀念の哲学や宗教を否定して、生々しい現実から眞実の生活原理を得ようとする人達」が多くなった<sup>8</sup>。この記述で言われるとおり、まず注目されるのは実践を唱える学生たちによって反復して語られる旧来の理想に対する訣別の意思表示である。

たとえば中村重一「新らしき出発——亡びゆく個人主義の唄」（二三四号、一九二六・二）が語るのは、かつての学生

にとつての「真理」であつた「個人主義」についての懷疑と批判である。現下の混沌とした社会状況のなかで「自由」と「博愛」の合言葉は干からび、「個人主義の深い井戸の水」は濁つてしまつてゐる。「新らしき自己の確立」を切望する若者に必要なのは、より具体的な「新らしい合言葉」であつた。

自己であれ！だが一切の他と自己との関係は如何。(略)一意専心に自己を知る途に精進してゆく瞬間にも街頭に餓えゆく人々があるではないか。(略)美しい言葉と物語りに耽る事によつて己れ自らの不安は忘れられましょう。けれども問題は(略)未解決のままに残る。然も個人主義は、決して自己以外の他一切に対して無関心であれとは云はない。個人主義そのものから我々は全体に対しての関心を教へられたのであつた。

中村によれば、「個人主義」は人に対して「自己」であることを要求し、一心に「精進」することを説くが、それでは他者は救われない。ところが中村に「全体に対しての関心」を教えたのは、他ならぬ「個人主義」だったのである。中村はさらに「個人主義」の実践面での欠陥として、「個」を中心として考えるために、「その思考内容が遂に現実と離れてしまう」ことを挙げている。その欠陥を補うに

は「社会的認識」を得なければならぬ。中村にとつて「個人主義の合言葉」は歴史の進展を阻むものであり、今後必要とされるのは「個性を没却して、行動的」であることだつた。このように「個人主義」の否定を唱へた中村は、「永遠の真理」に拘泥する「形而上学者」への訣別を表明して論を結んでゐる。

我々は永遠の真理を求めんとして、その日の真理をすら忘れる形而上学者の愚を学ぶまい。哲学者達の蒼白いお上品な手が「絶対的」と云ふ美しい夢の片を弄びつゝある時に、世界には黒い飢餓と圧迫の鞭が虐げられし大衆にひしひしと当てられてゐる事を忘れまい。(略)「絶対的」なるものに対する哲学者らの良心が満足せられると同時に、彼等の瞳は最早や現実を眺め得られなくなる。かくして彼等は食ひ足りた豚の如くに、腐敗した小屋を「絶対的」な美しい殿堂と思ふのである。

こうして中村は「自己」を尊重し「全体」への関心を教へる「個人主義」を退け、「虐げられし大衆」とともに戦う決意を唱へるに至つた。彼のように「個」の限界を悟り新たな「行動」の道を模索することは、例えば当時小林多喜二も日記のなかで読書を通じた人格陶冶についての懷疑を漏らし、「個は衆を発見しなければならぬ」と書き記し

ていたように、この時期の若者に少なからず共有されていた問題意識であったと言える。<sup>(9)</sup>

次に、中村と同時期に在籍し、より直截的に「行動」を唱えた大竹平四郎の言説をみてみよう。『尚志会雑誌』に計五回にわたって作品を投稿した大竹の作風は、当時から指摘されているように、第一三二号に掲載の「畜生めっ！」以降急速な左傾を遂げている。<sup>(10)</sup>ここでは大竹の『尚志会雑誌』への最後の掲載であり思想的転回の締めくくりとも言える「Kleinbürger (Petty Bourgeois)」(二三四号、一九二六・二)を見てみたい。そこに描かれるのは、経済的な苦境から生じる心労のため発狂してしまう母をもつ一家の姿である。主人公である息子は狂気の母を思い、「戦闘」への決意を表明している。

人生と青春とを取返せ！

認識、世界、生命？

思想の奔放な発展。だが現実の力は何処にも無いぞ。

(略)

虚偽、罪悪、暴虐——この世界。

強き現実の力は彼の胸を充し、微笑は力と希望にみな

ぎる。

過去、一切の歴史は階級闘争の歴史である。

世界の解放、必然の世界より自由の王国への飛躍！

法則を認識した人類は今法則を支配しようとする。  
戦闘よ！我らの生活はその中にこそある。

作品終盤、息子が「あかいなか」に入ることを心配する母を主人公は安心させるが、内心で思いをめぐらせていたのは、「プロレタリアは如何にして解放される可きか」という問題だった。作品の最後では母の狂気は悪化し、入院を余儀なくされる。母の入院を彼に告げる妹からの手紙には、兄に対して「どうぞ益々そちの道を御進み下さい」と書かれ、暗に彼が既に共産主義運動に関与し始めたことが示されるのである。<sup>(11)</sup>

引用中、「認識、世界、生命」や「思想の奔放な発展」が「現実の力は何処にも無い」との評価を下されていることに注意しよう。このような断定は前作の「小さな景色」(二三三号、一九二五・一二)にも見られ、ここでは「すくひなき、古き哲学と古き芸術」や「星と葦の夢色の物語」を蹂躪して「街頭」にでることが叫ばれている。過去の観照的な理想の否定を表明し、マルクス主義という新たな信条へと身を託しつつある、すなわちまさに左傾しつつある学生の姿がここに読み取れる。

大竹の「Kleinbürger (Petty Bourgeois)」が掲載された翌号の藤澤真苗「街」(二三五号、一九二六・六)では、教養主義からマルクス主義へ移行する学生の姿がより日常的な、

日々の学生生活を舞台に物語られている。登場する三人の学生がともに話題にするのは、これまでの「思想」「芸術」「文化」「真理」に対する訣別と、「世界を変革する」という新たな理想であった。主人公である俊二のもとに届けられた友人篠井の手紙には、このように書かれている。

思想や芸術を弄ぶ者の殆ど感知し得ないところに、甦る人間の生活のあることを痛感する。(略)君の今までの言葉が(略)単に若さの憧憬るる空なる殿堂への思慕に過ぎなかつたならば、そこには決して君自身の生活は無かつたのだ。

こゝに絢爛たる文化の殿堂がある。(略)人々はその輝かしい殿堂の中に真理と美と理想とを青い杯に盛りつゝ、狂ほしい乱舞を続けてゐるのだ。

篠井は、学生に必要なのは「生活への根本的態度の変革」であることを説き、困難を乗り越えて真実に目を向けるよう俊二を鼓舞する。篠井の言葉に俊二は強く感化されてこう語っている。

……自分の生活を生きて来なかつた……

虐げられ欺かれて来た魂がいたましくも叫ぶ。然しながらその声はあらゆる虚妄をたゞき切つて正しさに生きる示唆であつた。

都会の外貌の壮麗さのみを眺めて来た彼は観念の世

界にのみ美はしさと豊かさを持つた。ゆるぎもせずに関く厚い花卉の様な屋根の色彩のみを見てその下の生活忘れてゐたのだ。

賑やかな大通りの「横の暗い露地」に貧しい人々の生活があることに気づき「新しい気持」を起こそうとする俊二に友人の内海が声をかけ、二人はカフェで紅茶を飲みながら篠井を話題にする。内海は自らの思いを俊二に語った。

僕はこのごろになつて篠井の言つてゐたことの正しさを知ることが出来たよ。天上の理想と真理を見つめながら実際は足もとの危い彷徨を続けて来たことを自ら恥ぢる。(略)生活に根を持つてゐない無用な論議や刻々に進展する現実と何のか、はりもない超絶的な真理観念、あらゆるそれ等を惜しげもなく捨て去る時が来たんだ。だから、哲学者は今までいろんな風に世界を解説して来たけれどもそれよりも肝要なのは世界を変革することだつたんだ、ね。

内海は「世界の解釈から変革へ」というマルクスのフォイエールバッハ・テーゼを引きながら、「天上の理想」や「超絶的な真理観念」との訣別を熟っぽく語っている訳である。

このように、この時期の学生の言説には実践への決意と表裏一体となつて旧来の芸術や思想に対する訣別が心情的

に共有されていた。「個人主義」、「思想の奔放な発展」、「天上の理想」などはすべて実践や行動とは対極的な観念として否定的に表象されている。学生たちは自ら思索の道程の末にこうした認識に辿り着いたと言えるが、その認識に至る内的変遷をより鮮明に描くのが、鶴飼信成「生活と階級意識——言葉と行為との弁証的統一への過程」（二三四号、一九二六・二）である。鶴飼が描く「厭世観」に陥った青年は、はじめ「神」によって救済され、「普遍化せられた一つの生」が「主観の奥深く鑿り下げる自照的努力」によって「朽ちざる王国」を築くことを信じていたが、次第に救済を「自我の内奥にひそむ普遍的自我」に求めることに疑問を抱き、人道主義的立場を通過点として、最後には「大衆」を発見するに至る。

今や個人的人格観念は、それが人間的行動の外観を有し得た時にすら、社会的力ではないのだ。彼自身の階級生活の上に、さ、やかな愛の行ひもて生きることは、血にまみれた社会の歩みをいさ、かでも動かし得はしないのだ。(略)見よ！隷属と虐殺とのたゞ中より、自由と人間性とへの曙に目覚めゆく大衆のどよめきを。(略)世界を種々に解釈した数多いあの哲学者たち、彼等は生活と現実との奔流を遠くから恐る々々見守り乍ら、自らの体系を建設した。現実がその体系を拒け

て急角度を描いて駛り去る時、彼等は世界を否認した。現実が誤つたのだ。さう叫び乍ら空しく歴史の必然に裏切られて行つたあはれな絶対的真理の抜殻よ。

彼が発見した「大衆」はやがてあらゆる階級的存在を否定するものであり、それゆえに彼等には「普遍的客観性」を主張する根拠がある。この青年は鶴飼自身に見立てられているが、鶴飼が学生時に辿つた思索の路は、大正から昭和へと至る思想界の推移が一人の学生の内的変遷として縮約的に再現されていると言える。真理や信仰への憧れから失望へという思索の道程は菅井和夫「馬車馬の進行」（三九号、一九二七・一二）にも表れ、そこでは「真理の殿堂」に憧れて二高に入学した主人公が、石川啄木の詩に感動して「人は青年は、而して吾は如何に生くべきか？」と煩悶する姿が描かれている。彼はクロポトキンに感銘を受け、キリスト教の信仰を手にした友人に対して批判的となり、「過去一切の宗教、正義、道徳、芸術の観念」は階級対立を存続させるものでしかないことを悟る。彼は「観念の栄光の中に溺れる」哲学青年たちに「反動的哲学の芽」を見るのである。

他にも浅野定夫「学生の未来——知識階級——に就て」（二四一号、一九二八・六）では、「絶対的なものを空中に作」って総てを「観念的に説明し解決しやうとする」試み

の無力さについて書かれ、現実を直視しない「インテリゲンチヤ並びに学生」は「ブルジョア哲学、愛、服従の美德等を賛へ鼓吹して人をして観念的な考へ方に止まらしめ抽象の中に人を考へ社会を考へしめんとする」と批判されている。さらに同様の批判は、吉村貞文「歩み行く」(二四一号、一九二八・六)にも見ることができぬ。

世の学者連中のやる事為す事は、どれだけの効果を齎すであらうか。現実の社会と没交渉な事を誇らしげに研究して(略)大きな面をして居る。(略)哲学者にして其の大部分は観念論と言ふサビタナマクラ刀を以て世界を解剖しようと勤めて居る。それに盲目的に帰依して「あゝ人生とは何ぞや。」曰く「不可解也」などと、ドグマに陥り、お代りのない生命までを観念者に献上してしまふ。(略)認識の標準は実践だ、牛肉を知る事は之を食ふ事だ。酒を知る事は之を飲む中にある。真理の証明は須く実践にあるのだ。実践を離れての理論は不具者も同然だ。

観照的な思索に対する訣別と実践の必要性を説く言説は他にも枚挙に暇がなく、評論、散文詩、小説など様々な表現形態をとって知識階級の「使命」が語られている。この時期の学生たちに広く共有されていた旧来の思想や芸術への反感は、既に述べたようにしばしばフォイエエルバッハ・

テーゼの表現を借りて表明されたものであった。しかしそれは単に読書によって感得した抽象的な哲学批判を唱えていた訳ではない。学生たちの批判の背景にあったのは、大正期に一世を風靡した理想の権威失墜という現実的な事態である。

## 2 知識人界における「自己の探求」の末路

学生を思想的な文脈で捉えようとするとき、踏まえなければならぬのは文壇や批評壇をはじめとする広く知識人界の動向である。作家や批評家、思想家といった職業知識人が主張や論争を繰り広げる舞台である知識人界の動向と旧制高校の学生達の思想動向は強く結びついている。ある思想の総合雑誌や文芸雑誌での流行は、そのまま全国の高等学校へと拡大した。『中央公論』と『改造』の二冊は知識階級にとつての必読書であり、そこに掲載された論文や小説がその月の話題の中心になった。人々は総合雑誌の購読によつて「教養共同体」という知識階級の公共圏を形成し、皆が読んでいる雑誌に目を通さないことは、「時代に遅れると思われていた」<sup>1)</sup>のである。学生は、書籍や雑誌を通じて自分の思想を形作る術語を獲得するのであり、知識人界の思想動向を参照枠とすることで、学生の思



想の変化の契機をより構造的に捉えることが可能となる。

本稿ではマルクス主義の移入とともに知識人界に生じた変動として、大正期に広く支持された「教養派」の理想の失墜を特筆したい。阿部次郎『三太郎の日記』に典型的にみられる「普遍」「神」「人類」など普遍的理念への到達を念頭においた「自己の探求」<sup>15</sup>という内面的な真理探究の様式は、広く大正期の文学者や思想家によって唱えられていた理想であった。しかしその理想は、知識階級が（社会）を発見してより後、次第に批判の対象へと変わってゆく。その一方でマルクス主義の影響力は急激に強まり、大正最後の年である一九二六年には、書店の店頭に並べられたマルクス主義の書籍雑誌が他の書籍雑誌を押しつけて最前列の空間を占拠するようになっていた。<sup>17</sup>

マルクス主義が席捲を続ける一九二九年、広津和郎は「わが心を語る」（『改造』六月号）のなかで、「自己の探求」が最終的に迎えた運命について次のように語っている。

実際個性の独自性とは何なのであらうか？（略）或時は、結局生活とは、自己の探求の外にはない、などと云つた人々もあつた。自己万能、自己の中には総てのものをうつす鏡がある。自己を掘り下げてぶつかる以外に、人間の事は解るものではない。社会の事は解るものではない。人生とは己れ自身を知る道だ。そんな

風に云つた人々もあつた。（略）さうしたいろいろな心持の押し進めが、次第々々に私を前へ前へと進めて行つた。そして結局眼の前に見えたものは、虚無の洞穴だつた。

「自己の探求」の果てに見つかると思われていた「総てのものをうつす鏡」は、遂に「虚無の洞穴」でしかなかった。この引用部分に続けて広津は、大正期に「神」「人類」「個性」といった「聖壇」へのかすずきのもとで「めいめいの道を歩いて行つた」人々は「皆くたくたに疲れ切つてしまつて」と続いている。「自己の探求」はマルクス主義全盛の時代にあつて、もはや魅力と説得性を失つた過去の理想になつていた。中村や鵜飼が、「自己」であることを要求し「全体」への関心を説く「個人主義」や「主観の奥深く鑿り下げる自照的努力」による「普遍化せられた一つの生」の実現を信じられなくなつていたまさしく同じ時期に、知識人界においては大正的な「自己の探求」の無効化が進行していたのである。

また、「自己の探求」の主唱者であつた阿部次郎は、一九二一年頃より階級対立解決の方策として「人格」の完成を第一義とする「人格主義」を明確に打ち出すようになっていた。しかしその観照的性格は発表直後より各方面から批判の対象となり、一九二二年には『改造』と『新潮』を

舞台として、阿部と若きマルクス主義者である竹内仁のあいだに数度にわたる論争が行われている。人格主義が「思想を実行に移さうとする情熱」を欠いていると批判する竹内に対して阿部の回答は、自分の使命は「原理に深入する」人間になることであり、原理が実行にならなければ無意味であることは認めるが、「原理に深入する」者の最大の実行は「聖」の理想に参加することにあるというものだった。

当時において、阿部の回答は思想に関心する人々に十分な満足を与えるのではなく、竹内による人格主義批判の結果、当時「人格主義万歳の天地」であった「文芸批評壇」には「急角度の回転に向かふ機運」が生じたと評されている。<sup>(18)</sup> こうして人格主義はマルクス主義的立場からの批判により、知識人界における思想的権威を失っていったのである。

さらに人格主義の失墜は、知識人界にとどまらず高等学校レベルにまで波及した現象であった。旧制福岡高等学校の寮史には次のように述べられている。

明治大正のあの滔々として若き学生の心を惹いた、ロマンチックな人格主義も、もはや彼等が大きな関心をもつて眺め彼らのヒューマニズムを刺激した大きな社会的矛盾を解決するためには、あまりにも無力であつ

た。(略) 自分達の抱きし最高善とよばれるペルソナリヒカイトのあまりにも無力なるを知るや、彼らの眼には新鮮なしかも力強い実践とをもつて迫り来るものがあつた。それが唯物論哲学であり、赤化思想であつた。<sup>(19)</sup>

かつて学生の心を惹いた人格主義や「ペルソンリヒカイト」はもはや無力な思想でしかない。引用の最後で言われているように、人格主義の無力と対照的に眼前へと現われてきたのが、「唯物論哲学」であり、「赤化思想」であつたことを銘記しておきたい。学生たちは、人格主義の無力を悟ってマルクス主義へと移っていったとも言えるだろう。そして人格主義が次第に魅力を失っていったこの時期、人格陶冶の手段としての「教養」の価値も急速に低下する。この時期に生じた「教養」の不評判について、阿部次郎自身が後年こう語っている。

それは十年以前の昔である。知人の某出版社が或叢書を出版せむとしたとき彼はこれに教養叢書と命名しようとした。併し彼の店の花形であつた若い店員はこの命名に反対した。《教養》という言葉は既に黷臭くなつて今日の人心を牽引する力がないといふのである。

——私と同じ時代の空気の中に育つたその店主は、我々が重んじて真面目に考へて来た《教養》がそれほ

ど軽視されるやうになつてゐることを発見して、驚き笑ひながらこのことを私に話した。<sup>(20)</sup>

ここにいう「十年前」とは、上山春平によつて関東大震災ころ、すなわち一九二三年であると推定されている<sup>(21)</sup>。引用中の「某出版社」は岩波書店を、「その店主」は岩波茂雄を指すが、先に引用した人格主義の失墜とほぼ同時期に、「人格」向上の手段である「教養」も価値を低下させていたのである。

「自己」や「人格」の理想が思想状況の変化に対応できず魅力を失つたことは、大正末期以降続発する学生左傾の理由にも影響を及ぼしている。文部省学生部編『左傾学生生徒の手記』全三冊（文部省、非売品、一九三四―三五）には、思想信念を左傾の原因と告白する学生の手記が多数含まれている。そこで語られるのは、「書齋的」に「芸術至上主義的態度」を保持していた青年がマルクス主義へと移行する姿であり、あるいは「人道と云ふ言葉を偶像の様に崇拜する所謂人道主義」の限界をマルクス主義に教えられた姿であった。以下に一例を引用しておこう。

私は×××大学予科に入つて以来、虚弱なものにも拘はらず終始デカダンの生活をして居ましたが、一方絶えず内的な苦惱を自分は感じていて、それから出脱すべく武者小路一派の人道主義に耳をかしたこともあり、

結局自己の犯した苦惱は自我の未完成、人格の未発達の為だといふ考へに自分は達して居ました。そして只管自分は自己の完成へと小我を脱すべく努力し続けましたが（略）自分の生活は絶えず憂鬱に充ちて居ました。処が一方同級生のマルキストM・S諸君の非常に意気に燃えた活々たる生活の姿を絶えず考へさせられて居ました。彼等が斯うした率直な生活にひたつて居るには彼等の世界観が然うさするのではないだらうか、斯うした考へがたま／＼昨年の十月頃M君の勧誘で弁論部に入り、更にS・Sに入る動機になり、マルクス主義を研究して見様といふ考へに成つたのです。<sup>(22)</sup>

この学生は、はじめ「デカダンの生活」から脱出するために「武者小路一派の人道主義」に依拠し、「人格の未発達」を自覚して「自己の完成」を目指していた。しかしそれにより救いは得られず、行き着いたのがマルクス主義だったのである。

### 3 第二高等学校における「自己の探求」の総括

#### 「新理想主義」の提唱

「自己の探求」や「人格の完成」は、このようにもはや知識階級にとつての魅力と説得性を失つていた。『尚志会

雑誌』にみられる従来の思想や芸術に対する訣別は、知識人界におけるこうした理想の失墜という事態を受けた、あるいは同時進行的に生じたものとして構造的に捉えるべきだろう。

もつとも、マルクス主義全盛期の二高にあつても、それに対抗しようとする勢力がない訳ではなかった。「新理想主義」と呼ばれる新たな一派の形成である。岸貞雄（一九二八卒、尾高邦雄（一九二九卒）、小野浩（一九三〇卒）ら中心的人物はロマン・ロランとベートーベンを賛美し、左傾学生からは侮蔑の対象となつた「自己」の探求を再び説いていた。彼等にとって「唯物論」とは既に過去の産物であり、「環境」が「自我」を拘束するという短絡的な発想に基づく誤謬の思想であつた。

たとえば岸貞雄「懐疑的な余りに懐疑的な」（二三八号、一九二七・九）は、カントの哲学が「唯物論又は素朴实在論」に対して「致命的批判」を与えていることを指摘し「唯物論の否定」を試みるものである。また、岸に続く尾高邦雄「戦闘的理想主義への転向」（二四二号、一九二八・一）は、「不滅の宇宙的啓示」である「火花の輝き」を魂に感受するためには「Denken」と「Philosophieren」をおこなうための「神聖なる発源地」を見出さなければならぬとの立場のもと、「自己」を見詰めることを提唱してい

る。

名称はなんでもいゝ。要は何等の自己欺瞞なしに、直接、真摯、純粹に、然も生命的人間的に「自己」を見凝めることであらばいゝのだ。Dilettant 共や、所謂「術学的社会主義者」共が、その事に如何なる名称を与へ、如何なる辱めを加へようとしてあせらう共、結局それ等は真摯なる人間的 Denker、厳肅にして生命的なる Philosoph の何等憂慮すべき事柄には属し得ないのだ。（略）「自己」の真実の為には、假令時代の主張に添はず社会の中に忘却されやう共、尚「自己」に忠実であり、生命の輝きに於て純粹であり得る者こそ、却つて時代より進んでそれを超越し得る者たる事が出来るのだ。

尾高にとつて重要なのは、「真摯」であり「純粹」であることであつて、「生命的人間的」に「自己」を見つめることである。「自己」へ「より、深刻なる自覚的浸潜」をおこない「社会に忘却」されようとも自己への沈潜を貫徹すること時代を超越することができる。尾高は、「哲学的思索」に沈潜することの必要を説き、孤独な思索の試みと真実への愛着こそが「人生そのもの、姿」であると宣言する。未来の「組織的文化社会」は、「人間性の自覚、魂の光輝の増大性に於けるより、深き愛と、より高き信念」に

よって建設するものなのであった。論説の最後半では「自己を偽はる事なき戦」への決意が情熱的な言葉で語られている。<sup>23)</sup>

ベートーフェンの第五交響楽の第三楽章からフィナーレの「運命の克服」への転換に於ける戦闘的なメロデーの如く、私の魂は次第に光明を掴んで行く！ ニイチエの「進攻的激情」<sup>パトス</sup>が、その永続的な生命的リズムを以て私の魂の中に滲み込んで行く！（略）人生の暗闇から踊り出す幾多の魂の敵、生命をその根底から脅す非生命的な妖怪、そして総ての悪辣な吸血鬼共（略）それ等に対してとるべき態度は、たゞ、永遠の熱烈なる戦のみだ！ 常に自己を偽はる事なき戦のみだ！——

尾高と同様に「芸術」による矛盾の克服を説く小野浩の小説「巨人的浪漫主義の開扉」（一四二号、一九二八・二二）の主人公は、永久性をめぐる思索の末に人間の生が泡沫に過ぎないことを悟り、虚無に陥ってキリストと宗教を否定する。その絶望から一旦は起ち上がるが、再び今度は懷疑主義に陥ってしまう。その状況から彼を救ったのは、ベートーベンの交響曲であった。人生が「矛盾の対立」であることを受け入れた彼は、あらゆる困難に立ち向かう「苦闘の人生」を肯定し、「悲劇を以て、悲劇を救済」すること

を受け容れるのだった。小野はまた「若き魂へ」（一四三号、一九二九・一〇）においては、「何等の自己欺瞞なしに自己を解剖し批判し、真摯に自己本然の姿を凝視しなければならぬ」ことを説き、「自己」を探求することの重要性を改めて確認している。<sup>24)</sup>

このように、『尚志会雑誌』の誌上ではマルクス主義の影響力が浸透する一方で、それに対抗し「自己」の復権を目指す岸、尾高、小野といった理想主義的立場も登場していた。しかし二高においてこうした理想主義は一括して批判され、信奉すべき信念としてマルクス主義が強く印象づけられることとなる。その担い手となったのは、後に歴史学者として名を馳せる若き日の石母田正であった。

#### 石母田正による「自己の探求」の総括

後に『中世的世界の形成』（一九四六年）や『歴史と民族の発見』（一九五二年）などによって戦後歴史学に多大な影響を与えることになる石母田は第二高等学校に在籍中、『尚志会雑誌』の第一四四号（一九三〇・二）に「リアリズム覚書」を、続く第一四五号（一九三〇・六）に「二高生の思想の解剖——より生きんとする二高生に」を発表している。前者で石母田は岸貞雄、尾高邦雄、小野浩たち「新理想主義」の主唱者を批判の対象とし、彼等の思想のいずれ

もに「いかめしい題目」が設けられ、「ロマンチスト好み、金ばくづきの輝かしい言葉」（生命、創造、苦闘、人間、不滅、純粹的など）が羅列されるのみならず、「要らない独逸語」が頻繁に登場し、「思想を混乱させるばかりな、ペダンティックな引用」が繰り返されることを指摘した。彼等の思想とは、こうした「輝かしい言葉」なしには存在し得ないものである。石母田にとって彼等の社会認識は「Pre-Marx」であり、そのために「現代の一切の精神的危機」が「ブルジョアジーの精神的危機」であることを認識することができないのだった。

このように「新理想主義」を退けて、石母田は翌号の「二高生の思想の解剖——より生きんとする二高生に」（一四五号、一九三〇・六）において第二高等学校の学生全体を広く批判の俎上に載せている。石母田によれば、現在の二高には「素朴なロマンチスト」「不徹底なニヒリスト」「安価なデカダン」「鼻もちのならないセンチメンタリスト」など様々なイデオログが存在しているが、それらはすべて「生きる情熱」を欠いている。この状況を打開することこそが、二高生の「何よりもまず第一に関心すべき、究明すべき」問題であった。石母田はそのために、二高生の思想の基調をなす「自由主義的個人主義」がなぜ行き詰まらなければならなかったかについて論じている。

社会の安定が崩れるにつれ、人生に対する「素朴な信頼」を失った二高生は、動揺と煩悶の原因を求めて「自己」の存在に行き着く。彼等は「自己」の内面を深化し、「光彩多き体験」へと深く沈潜していった。それによって人生に対する確固とした解釈が獲得され、懷疑を克服できると考えたからである。

「自己を知れ！」「先づ自己を凝視せよ！」、これは彼等の唯一の目標であった。「個性を深く掘り下げて行けばそこには滾々として湧く創造の泉がある」これ彼等の唯一の信念であった。「個性の泉から秘かに語る自己の内面的意識の言葉に傾聴すること」これ彼等の唯一の悦びであった。

「自己」を尊重し、自己の奥底に潜む「創造の泉」を目指して「個性」を深く掘り下げること。大正期にもてはやされ今では既に幻滅の対象である「自己の探求」の理想について、石母田は直截的に批判している。そして石母田が「自己の探求」の隆盛と失墜について語るとき、持ち出されるのは本稿第二節で取り上げた阿部次郎と広津和郎の言説だった。石母田はまず『三太郎の日記』を引き合いに、次のように語っている。

知識階級の没落に依て創造の泉を、充実した、色彩鮮やかな内面生活を剝奪せられた二高生にとつて、従来迄は

驚異と喜悅であつた内省、自己沈潜は、却て苦痛に迄転化した。少しの誠実さを有する二高生で（略）自己の創造の泉に驚異して、内省と自己沈潜に悦びを感じるものが幾人あるか。あるとしたら「輝しき高校生活」を謳歌する、又は大臣を夢みる、ドン・キホーテ位であらう。

石母田にとって「自己沈潜」や「創造の泉」の理想がもはや説得力をもたず没落してしまつたことは、言論界の動向を見れば分かることだつた。石母田は広津和郎が吐露する大正期の理想の末路——「虚無の洞穴」に言及したうえで、「自己の内面化」が辿つた運命について分析している。

此の「自己の内面化」の歴史は日本知識階級の歴史の直接の表現である。我々は阿部氏から広津氏に至る歴史即ち自己の内面化が悦びから虚無の洞穴になる迄の歴史を（略）偶然的なものとして考へてはならない。（略）自己の内面化が創造と悦びから虚無の認識に迄転化したのは、自己の内面にのみ沈潜することが「考へ方」として決して発展性あるものでなく、遂には結局その自己の枠に衝き当らねばならない必然性を持つこと、次には知識階級の創造の果をなしてゐた生命力が、資本家階級の没落のため剝奪せられたこと又新興階級からの圧迫のために外ならない。

二高生の「弱さ」は「知識階級そのものの弱さ」の表現である。この弱さを打破し、真に戦闘的な、強い性格になるためには、「自己の属する階級そのものの克服、揚棄」に努めねばならない。それを可能とするのが、知識階級の目の前で戦つてゐる「真に実践的、戦闘的な階級」であつた。知識階級は「個性」を「絶対的なもの」として見るが、石母田は「個性の階級性」をみる。「個性」は「真に将来ある階級に埋没」することによつてのみ前進することができるのである。石母田は論説の最後を、次の言葉で結んでゐる。

二高生は従來の知識階級と同様の道を歩むことによつては、決して自身を行き詰まりから救ふことは出来ない。何故なら、繰り返し云へば、二高生の行き詰りは知識階級の行き詰りそのものであるから。（略）より生きんとする二高生よ、果敢に飛躍の一步を踏み出さうではないか。

このようにして石母田は、旧來の「自己の内面化」に對して、發展形として現われた理想主義や虚無主義も斥けながら徹底的な清算を行うことで二高生の「生活態度」を批判し、「戦闘的な階級」とともに戦うという「使命」を明確化したのであつた。

炬燵の暖かさ

しかし、石母田の論理に共感しても、なお実践に身を投ずることは学生にとって至難な課題であった。北二郎「告白」(二四六号、一九三〇・一二)では、石母田の論説によって大きな思想的变化を被りながらも、なお思想と実践の間にある距離の大きさについて正直に告白されている。冒頭から「精算すべき秋が来た」と述べる北は、「自己内面の奥底に沈潜」してきた自分の過去を清算しようとしている。

虚無的だけれど浪漫的な諦めに静寂を享受し、人生は悲喜劇の連続に過ぎぬ、凡てのものは許されて居ると考へてきた男。斯う考へて恰かも自己内面の奥底に沈潜して得たかの如き歓喜のもとに自己一人だけの小国を創造して平和にも殻の中におさまつてきた男、その男に最後の時が到来したんだ。

北は「自己の空虚の発見」と「周囲の矛盾痛感」とによつてこれまでの自分が抱いていた理想への信頼を失い、苦悩に陥つたという。そして彼は石母田の名を挙げた。

石母田氏の解剖台にのぼればいとも簡単な病氣なんだ。病名曰く、自己内面的傾向或は個人主義的傾向を有する、と。全く其通りだと思つてる。だから名医の診断に対して深い敬虔と驚異とを感じた。

石母田に対して「深い敬虔と驚異」を感じたという北は、

しかし同時に「羨望と疑惑」をも抱いたという。それは、北にとって自己の階級を揚棄することはそう簡単に成し遂げられることではなかったからである。北は、「家族制度の思想」を存分に注入されて育ち、時代の流れに従うよう育てられ、気の進まぬ学校に進学している。それはあたかも周りの景色に対してとやかく云うことを禁止されたまま船を漕ぐ船頭のようなだったが、その船頭を「射す夕陽は美しく」、「青春の心に美しく映り、感傷的で感激的な誘惑が生じて「船をとび出す勇気を鈍ら」すのだった。さらに一層悪いことには、彼の「先天的性質」が行動のじやまをするということだった。それを彼は、「炬燵なんてと思ひながら雪降る音に詩的快感を受けながら炬燵から離れ得ない男」と表現している。

プロ小説を読んでもピンと来ぬ様に生みつけられ、育てられて来た男だ。崩壊する階級と心中するあはれな男なんだ、と。そして陶酔、感傷、夢、享楽を求めて慰安をたつねる。時代はこの逃避に対してだけは双手を挙げて待つて居る。シネマ、カツフェー、撞球、麻雀、エロ、グロ、ナンセンスE.T.C、等々、決して不自由はしない。

北は決して開き直っている訳ではない。彼は「実践」に参加する勇気をもたず「慰安」を捨てられない自分に対して



「空虚な淋しさ」を感じ、考えては逃避し、「自己嘲笑に泣き笑ひ」していたのであった。頭では観照的な知識階級の生活を捨てていくべきだとは分かっていたとしても、どうしても実践には飛び込んでゆけない学生の姿がここに描かれていると言ってよいだろう。「世界を変えなければいけない」ことは漠然としながらも自明であったが、自分が主体的に革命に参加できるかどうかは別の問題だったのである。

結論にかえて——「思索」の復活と昭和期教養主義

以上、ここに至るまで見てきたことを確認したい。本稿では、革命の思想に共感して「行動」や「実践」を唱えるマルクス主義全盛期の高等学校生の群像を思想的見地から再考察してきた。大正昭和転換期の二高における左傾学生の言説には、世界を変革することに対する熱意が語られるなかで、「自己」「人格」「永遠」など大正期に一世を風靡した理想に対する強い反感が共有されていた。マルクス主義に反発する理想主義的立場からは「自己」の復権が試みられたが、石母田正はそれを徹底的に批判し、「虚無の洞穴」に至った。「自己の内面化」を、知識階級の没落と連関させて論理化したのであった。そこでは「知識階級の行き詰まり」から飛躍するために「戦闘的な階級」とともに

戦うことが謳われたが、北の告白にもあるように、「実践」を唱えることから実行に移すことは、なお学生たちにとつては難しい選択だった。

彼等のなかには卒業後、本格的な運動へと身を投じた者もいたが、高校時代の決意を行動には移さなかった学生も多くいた。しかし教養主義からマルクス主義へと移行する思想潮流の具体相を捉えるためには、「運動史」には残らないそのような多くの学生たちの言説を検討することが不可欠である。知識人界の思想動向に敏感に反応しつつ自らの思想を培っていた学生たちの声を再浮上させることで、この時代の知識階級を感化した思想の流通と受容の様態が、より立体的かつ生彩をもつて理解できるようになるだろう。最後に左翼全盛期以後の学生思想について若干触れておきたい。石母田の論説が『尚志会雑誌』に掲載されたのは一九三〇年だったが、以後次第に左翼的言説は紙面から減少し、本稿で扱ったような左翼席捲の時代は終わりを告げた。統制が強化される中で社会実践が不可能となった学生たちは、再び自己の内面へと沈潜してゆく。本田喜代治「知識階級の動搖」(『改造』一九三七・一一)は、社会に関心する「社会青年」に代わって登場した新しい「思想青年」についてこのように述べている。

嘗ての社会青年は一応の役割を終った。いつの時代に

かまた新しい政治青年新しい社会青年が要請されるであらうが、それまでは当分知識階級は思想青年として始終すべきである。(略)今は政治や社会や文学からさへ——文学を極く広義に解して哲学や歴史等をもそこに含め——インテリヂェンスの締め出しを食つてゐる時である。(略)インテリヂェンスは益々蹂躪されるだらう。それだけ知識階級は益々思想青年にならないければならない。なぜなら知識階級がインテリヂェンスを擁護しなくなつたら一体誰がそれをするであらうか？

学生たちが「社会青年」から「思想青年」となるとき、大正期に失墜した「教養」は復活した。いわゆる「昭和期教養主義」<sup>(25)</sup>がはじまる一九三五年頃を境として学生たちに支持されたのは、河合栄治郎の編纂した《学生叢書》である。『学生と教養』(一九三六)を嚆矢としてシリーズ化されたこの企画の執筆の担い手になったのは、マルクス主義の最盛期には御用哲学者、ブルジョア思想家のレットテルを貼られた阿部次郎、倉田百三、安倍能成など「教養派」の面々であった。大正期の教養主義からマルクス主義への推移を跡づけする一方で、今後はこうした「教養」の復権についてもさらに検討する必要があるだろう。

なお、本稿の調査を進めていた二〇〇四年七月、幸運に

も東北大学史料館がインターネット上で『尚志会雑誌』を含む二高関連資料の目次データベース提供を開始した。<sup>(26)</sup>後の調査がこれによって大いに助けられたことは言うまでもない。また、史料館の方々には調査上大変お世話になった。この場を借りて謝意を表したい。

## 注

- (1) 『尚志会雑誌』は、大正初期に「尚志」と改称されているが、本稿では統一して『尚志会雑誌』と表記した。
- (2) 濱口晴彦『日本の知識人と社会運動』、時潮社、一九七七、二七頁。
- (3) 筒井については『日本型「教養」の運命——歴史社会的考察』(岩波書店、一九九五)を、竹内の著作は『日本の近代——学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社、一九九九)、稲垣恭子との共編『不良・ヒーロー・左傾——教育と逸脱の社会学』(人文書院、二〇〇一)、『教養主義の没落』(中公新書、中央公論新社、二〇〇三)を参照のこと。
- (4) 『尚志会雑誌』の歴史については、第二高等学校史編集委員会編『第二高等学校史』(第二高等学校尚志同窓会、一九七九)の第二篇「尚志会史」、『尚志会全史』(第二高等学校尚志会雑誌部編、第二高等学校尚志会、一九三七)

の「雑誌部史」、『尚志会雑誌』第一三六号（一九二七）の「尚志会友部史」などを参照。

(5) 前掲『第二高等学校史』七七四—七七五頁。文芸誌化の傾向は当時の高等学校共通の現象であった。東京の第一高等学校でも、一九二二年になると校友会雑誌を本格的に文芸部雑誌へと変更し、それとは別に『向陵時報』を言論発表の機関誌とする改善案が出されたという。

(6) 二高の社会運動については、『第二高等学校史』の「社会主義運動史」を参照のこと。

(7) 『第二高等学校史』一二三八頁。

(8) 『尚志会雑誌』第一三六号、二二八—二二九頁。

(9) 『小林多喜二全集』第七卷、新日本出版社、一九八三、八八頁。

(10) 中村は後に弁護士。中山善雄・江藤武人編『天は東北山高く——旧制高等学校物語』財界評論社、一九六六、六四七頁。

(11) まず第一三〇号（一九二四）に「嗤はれるあいつ」を、以下「涙して待ち侘びてゐる」（一三一号、一九二五・二）、「畜生めっ！」（一三二号、一九二五）、「小さな景色」（一三三号、一九二五・一一）、「Kleinbürger (Petty Bourgeois)」（一三四号、一九二六・一二）と続く。

(12) 大竹は在籍中に社会思想研究会に所属、卒業後は東京帝国大学経済学部に進学するとともに新人会の会員となっ

ている。一九二九年の大学卒業から八年を経た一九三七年に病没。

(13) 鶴飼は後に国際基督教大学学長、東京大学名誉教授。

(14) 前掲『教養主義の没落』一四、三二頁。

(15) 「真正なる自己の国に導く力は、どうどうめぐりではなくして、掘り下げ、推し進め、かつき入り、沈み込む力でなければならぬ」（『阿部次郎全集』第一卷、角川書店、一九六〇、一三三頁）。「自己をみたす者は客観的、形而上的、宇宙的、人類的内容でなければならぬ。実在の中に沈潜する事は徹底的の意味において自己の空疎を救ふ唯一の方法である」（同一八四頁）。

(16) 「大戦後しばらくして」内省と沈潜とによつて発見された個性が、いまや社会の場に一つの地位を占めることになつた。それは個性の再発見であるが、また同時に、「社会」の新発見なのである（林要「新人会のあるところ」、東京大学協同組合出版部編『歴史をつくる学生たち』、東京大学協同組合出版部、一九四七、一五七頁）。

(17) 『木佐木日記』第二卷、現代史出版会、一九七五、一三八頁。

(18) 相田隆太郎「本年の評論界——文芸評論の左傾」、『新潮』一九二二・一二。拙稿「思考様式としての大正教養主義——唐木順三による阿部次郎批判の再検討を通じて」『国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第三

〇号、二一〇四。

(国際基督教大学大学院)

(19) 『福岡高等学校学而寮史』 福岡高等学校学而寮寮史編纂委員会編、一九四九、二二—二三頁。

(20) 阿部次郎「文化の中心問題としての教養」、一九三三。

(21) 上山春平『日本の思想 土着と欧化の系譜』(サイマル出版会、一九七二) 第二章「阿部次郎と大正教養主義」参照。

(22) 『左傾学生生徒の手記(復刻版)』 第一輯、新興出版社、一九九一、三二三頁。

(23) 尾高邦雄は二高を卒業後、東京帝国大学文学部社会学科に進学。在学中は猛烈に勉強し、入学の年の夏休みには計四一冊の社会学書を読破したという(尾高邦雄「デュルケームとジンメル」『世界の名著58 デュルケーム・ジンメル』中央公論社、一九八〇、一二頁)。戦後は国際社会学会理事・ハーバード大学客員教授・東京大学文学部社会学科主任教授を歴任。

(24) 小野は後に明治大学教授。小野の生涯のテーマは「ゲートとニーチェであったようで、「旧制高校廃止は日本文教政策最大の失敗であった」と述べていたという(前掲『天は東北山高く——旧制高等学校物語』六五八頁)。

(25) 渡辺かよ子『近現代日本の教養論——一九三〇年代を中心に』行路社、一九九七。

(26) <http://www.archives.tohoku.ac.jp/>